

人文・社会科学

問題冊子

指 示

合図があるまでは絶対に中を開けないこと

1. この試験は、資料を読んで、あなたがその内容をどの程度理解し、分析し、また総合的に判断することができるかを調べるためのものです。
2. この冊子は前半が資料で、後半に42の問題（1-42）があります。配点は80点満点です。解答カードには表裏あわせて50の解答欄がありますが、43以降は使用しないで下さい。
3. 解答のための時間は、正味80分です。資料を読む時間と解答を書く時間の区切りはありませんから、あわせて80分をどう使うかは自由です。
4. 解答のしかたは、問題の前に指示してあります。答えの記入のしかたが指示どおりでないと、正解でも無効になります。
5. 答えはすべて、解答カードの定められた枠の中に鉛筆を用いてマークして下さい。それ以外のところに書いたり、また答え以外のものを書きこんだりすると無効になります。
6. 一度書いた答えを訂正するには、消しゴムできれいに消してから、あらためて正しい答えを定められたとおりに、はっきりマークして下さい。
7. メモにはこの問題冊子の余白を用い、ほかの紙は使用しないで下さい。
8. 「解答やめ」の合図があったら、ただちにやめて下さい。試験監督が問題冊子と解答カードを集め終わるまでは、退室できません。
9. この指示について質問があるときは、試験監督に聞いて下さい。ただし問題の内容に関する質問はいっさい受けません。

「受験番号」を解答カードの定められたところに忘れずに書き入れること

(余 白)

I.

東西南北について語る時、私たちは多くの場合、それらに方角以上の意味を込めている。「今度の連休は南の方に行きたいね」と群馬県民が言えば、それは埼玉県に行きたいと言っているわけではなく、青い海や白い砂浜、ハイビスカスの花を思い浮かべているはずである。また「北酒場」「北の宿から」といった題名に見られるように、演歌における「北」は、すでにある特定の風景をまとっている。まして「東西冷戦」「南北問題」のような慣用句になると、それぞれの方角の含意するものはますます厚く、かつ対立的になる。そして「冷戦」や「問題」を引き起こす主体は、むろん土地ではなく、そこに住む人間たちである。

「東西南北という方角にはそれぞれ、そこに住む人間への先入観が付いてまわる」 — 留学先で私の師だったJ教授は言った。また「その先入観はヨーロッパ内の東西南北に対しても、全世界の東西南北に対してもある」と。そして彼は自らの考察を「先入観のトポロジー (Topology of Prejudice)」と呼んだ。トポロジーはギリシャ語の *topos* (場所) に由来する語で、J教授の発言の文脈に合わせて意訳すれば [A] となろう。

以下はJ教授のいう「先入観のトポロジー」の例である。

	北	南	西	東
富との関係	富裕	貧困	物質主義	精神主義
知性	知的	愚か	科学的	迷信的
発展度	文明的	原始的	成熟	未熟
競争への態度	自制的	暴力的	公正	狡猾
目標への態度	勤勉	怠惰	個人主義	集団主義
行動様式	厳格	享楽的	真面目	浅はか

自集団や他集団を方角と結びつけ、特定のイメージで語ることは、有史以来、人類のあらゆる集団が行ってきたはずである。ポストモダンやグローバル化という語で形容される今日という時代、なぜ敢えてこのような古典的とも言える考察にJ教授は向かったのだろうか。

II.

まず、J教授がヨーロッパにおける「先入観のトポロジー」に敏感だった背景には、彼がスロヴァキア（旧チェコスロvakia）出身だったことがあるだろう。スロヴァキアはポーランド、チェコ、ハンガリーなどとともに「中欧 (Central Europe)」と呼びうる地帯にある。「西欧」「東欧」「北欧」、そしてやや頻度は低いが「南欧」という語が耳に親しいのに対し、日本にいる私たちにとっては「中欧」の浸透度はいまひとつである。だが「中欧」は、ヨーロッパ

を東西南北に分けることへの懷疑を呼び起す。わかりやすい「西欧」が西ローマ帝国の遺したカトリック文化圏、「東欧」が東ローマ帝国の遺した正教文化圏であれば、中欧は、宗教的には「西」の影響下にありながら正教の影響も受け、かつ民族的にはスラヴ系やマジャール（ハンガリー）人といった、「西」の人々から見て異質な人々を擁する。スロヴァキアも、オーストリアやチェコに近い西部では西欧文化の影響が強いが、ウクライナに近い東部ではスラヴ意識が強いと言われる。

このように様々な民族・文化が交差するヨーロッパに、今日あるような、方角に基づく先入観が根づいていったのはなぜか。その背景には、資本主義とそれに即した労働倫理の発達があるとJ教授は言う。一説によれば、16世紀から17世紀にかけて資本主義の発達がもっとも顕著だった[B]、イギリス、フランスは、いずれもプロテスタン系カルヴァン派の影響を受けた国であり、このことから、カルヴァン派のあいだで労働は、信仰とのつながりで奨励されていたと考えられる。「神のために労働し、富裕になるのはよいことだ。富が危険なのは、怠けたり、罪深い快樂を味わってみたくなったりする引き金になる時だけだ」——こうした信仰と結びついたカルヴァン派の勤勉が、結果として資本主義を発達させたというこの説は、今日、広く受け入れられている。

ここで、先に挙げた「先入観のトポロジー」の表を見ると、あることに気づく。それは資本主義的な労働倫理が、「北」と「西」の特徴とされていることだ。そして「南」や「東」は、明らかにそれらとの対比で負の意味を担わされている。つまりこれらの先入観の発信源は、北西ヨーロッパのプロテスタン系の人々であり、彼／彼女らの方角=人間觀が、資本主義の拡大に伴ってヨーロッパ中（および世界中）に広まっていたと推測できるのだ。

ヨーロッパにおける「先入観のトポロジー」は今日なお健在のようだ。2015年、ギリシャが、ヨーロッパ連合（EU）などから金融支援を受けながら財政破綻の危機に陥った際、最大の債権国であるドイツの大衆紙には「怠け者のギリシャ人を助ける必要はない」と主張する記事や投稿が多く掲載された。しかしギリシャ人労働者一人当たりの年間労働時間は、ドイツ人の1.5倍という統計結果（2014年）がある。さらには近年、ヨーロッパ西端のイギリスとフランスで、国民投票（イギリス）や大統領選（フランス）において、ヨーロッパ共同体のくびきを振り払ったり、あるいは振り払おうとしたりする動きが見られた。市民革命や産業革命をいち早く経験した両国での、一定数の人々にとって、自分たちより東や南のヨーロッパは[C]なのかもしれない。

さて、ヨーロッパで「先入観のトポロジー」が定着したもう一つの重要な契機として、東西冷戦を忘れてはならない。第二次世界大戦後、ソビエト連邦がヨーロッパ内の自国寄りの諸国を傘下に収めると、一帯は「東欧」と呼ばれるようになり、「中欧」は消滅した。そして「西欧」は、鉄のカーテンの向こうの「東欧」の異質性を強調した。「民主主義に対して全体主義

・共産主義、市場経済に対して統制・計画経済、N A T Oに対してワルシャワ条約機構、知性主義に対して反知性主義、それらの対立概念には、呪われた、悪しき非人間的社會という意味がいつも込められていた」と堀武昭は指摘する。政治や経済のシステムが、共産圏と非共産圏で異なるのは事実である。だがここで問題なのは、そのようなシステムの違いが、その中にいる人間の本性の違いに根ざしていると信じられ、語られることである。J教授の話に戻るならば、彼は冷戦真っただ中の1960年代に、家族とともにチェコスロvakiaからアメリカ合衆国に移民した人だ。10代だった彼が、学校などで「東欧」への先入観に基づく差別やからかいを経験したことは想像に難くない。

冷戦終結後、「中欧」諸国では、かつての「東欧」のレッテルを返上するために、必要以上に「中欧」を熱唱する気配があると小島亮は指摘する。本来持っていた誇りに人々が立ち返るという点では、それは悪いことではないかもしれない。だが中欧の人々が同時に、「自分たちよりも東の人々」の異質性を強調するなら、「先入観のトポロジー」はさして変化を被らないだろう。

III.

「先入観のトポロジー」は世界規模でも見られる。これが、J教授の考察の後半部分である。彼によれば、「北西」のヨーロッパ人・北米人に対して、「南」の性質を持つとされるのは黒人とラテン系、「東」の性質を持つとされるのはアジア人とイスラム教徒である。たしかに、「あちらの人間は享楽的で怠惰だから経済が破綻するのだ」という南欧への先入観は、そのままアフリカやラテンアメリカの人々に対しても向けられがちであるし、カトリックやプロテスタントから見て異質な正教、という見方は、さらに異質化した精神主義のイメージをまとめてイスラム教や仏教などの文化圏に投げかけられているとも言える。ヨーロッパと全世界、二つのレベルにおける「先入観のトポロジー」は、このように[D]の関係である。

ここで興味深いのが、2017年1月以降、大統領があからさまに「東」(イスラム教徒)や「南」(メキシコ人)を非難・排斥しているアメリカ合衆国だ。イギリスやフランスのEU離脱の動きについてはすでに述べたが、合衆国はこれらの国よりもさらに西にあり、かつ、ヨーロッパからの移住者たちが西へ西へと開拓を進めることで建てられた国である。このように「西」の中でも、自らの西性(West-ness)を主張するための材料をより多く持つ者(大統領個人の民族性も含め)ほど、他の方角=人間集団を批判したり、一方的に絶交を宣言したりする権利があるかのようにふるまうのは示唆的である。むろん、世界経済における「北西」の優位は、いわゆる主要7カ国(G7)会議の参加国の頗ぶれに見るように、先入観というよりも事実である。しかしその経済力の格差が、全世界のそれぞれの方角に住む人間の本性の違いから来るかのように論じることが問題なのは、先に述べた通りである。

ヨーロッパと全世界という、二つのレベルにおける「先入観のトポロジー」にJ教授が敏感だった背景には、彼が民族的にはユダヤ人だったことが深く関係しているだろう。世界の民族分布を見ても、ユダヤ人が「西」の人なのか「東」の人なのかを判じることはできない。それは彼／彼女らの故郷とされるイスラエル、パレスチナ一帯が、西欧から「近東」「中東」「中近東」などと呼ばれ、中途半端な東性（East-ness）を帯びさせられているからだけではない。ユダヤ人はローマ帝国からパレスチナを追われた後、その相当数がアルプスを北へと越えて「中欧」に入り、何世紀にもわたってそこに住んできたからである。つまりユダヤ人の相当数が、ヨーロッパ人なのだ。

J教授はスロヴァキアに生を受けたユダヤ人だった。学校では級友たちが、ときどき彼がいることを忘れて反ユダヤ的な冗談を言ったり、教会に行く話をしながら意味ありげに彼にニヤリと笑いかけたりした。また第二次大戦中、彼の祖父母は、他の300人ほどのユダヤ系村民やロマ（ジプシー）とともに、ナチスと同盟したスロヴァキア軍によって、軍が掘った塹壕に連れて行かれ、その場で射殺され、埋められた。現在その場所には、三つの十字架と赤い星のついたモニュメントが建つ。「ヨーロッパはユダヤ人の墓場である」という言葉を高橋和夫は紹介しているが、まさに、J教授の祖父母の眠るスロヴァキアの片田舎はその無数の墓場の一つであり、しかも歴史から消された、犠牲者を二重に葬り去った墓場である。

ユダヤ人がヨーロッパで苛烈な差別に遭ってきたのは、J教授によれば、「北」や「西」の人々から見ておとなしく「南」や「東」に収まっている存在、つまり先入観の境界線を侵犯する存在だからである。ユダヤ人は「南」の人間のように原始的で享楽的であり、「東」の人間のように浅はかで狡猾であり、それでいて「西」や「北」の人間のように知的で、物質主義的で、何より富裕である。この矛盾を説明するために、ヨーロッパの人々はユダヤ人に様々なイメージを抱わせた。その最たるものはユダヤ人を守銭奴、その所持金を「狡猾な手段で手に入れた汚い金」とする言説である。

だが、「先入観のトポロジー」はきわめて柔軟なもので、ユダヤ人を標的にすることで終わるわけではないとJ教授は言う。「もしこの世にユダヤ人がいなければ、彼らは創造されねばならない」と言う人もいる。実際、1970年代から80年代にかけて、GDP世界第二位の経済大国となった日本は、合衆国から激しいバッシングを浴びた。日本の市場の閉鎖性、円安などが、合衆国内で「狡猾な日本（人）」という批判を増大させ、日本人と間違われた中国系アメリカ人が、クライスラーの工場を解雇された白人男性たちによって撲殺されたり、国会議員たちが東芝の電気製品をテレビカメラの前で叩き壊すパフォーマンスが行われたりした。「先入観のトポロジー」の柔軟さ・終わりのなさはまた、誰から非難されていた集団が、自分と同じ方角から来たとされる他集団を非難する構図にも見て取れる。日本の大衆向けメディアが「チャイナマネーが不正に世界を征服しようとしている」と扇動的に報じるのは、その好例だ

ろう。

いっぽう宗教においては、今日イスラム教徒ほど、かつてのユダヤ人と似た位置に置かれている人々はいないだろう。ナチス時代への反省から、ヨーロッパでユダヤ人差別の禁忌が常識化する中、また合衆国で、ユダヤ系市民が国策を左右するほど主流化する中では、ユダヤ教とキリスト教の違いを強調する理由は少なく、むしろユダヤ・キリスト教的 (Judeo-Christian) な共通性が語られやすい。いっぽうイスラム教は、ユダヤ教・キリスト教と連続性を持ちながらも、7世紀の成立以来、ヨーロッパの南や東からキリスト教世界と対峙する存在であり、今日のEUの境界線引きにおいても「どこからがヨーロッパでないか」を規定する要素の一つである。それでも、長きにわたって多くのイスラム教徒が、ヨーロッパ人やアメリカ人としてごく普通に暮らしてきたのは、ユダヤ人と同じである。

だが2001年以来、テロリストと難民という「招かれざる客」が、イスラム教国から「北」「西」へと無視できない規模で流入し、少なからぬ市民や政治家が「イスラム嫌悪ないし恐怖 (Islamophobia)」を募らせている。実質的なテロリズムへの恐怖がある以上、イスラム嫌悪を「単なる偏見」と見なしたり、ユダヤ人差別と同列視したりすることは、正確さを欠くかもしれない。しかし多くの良心的な市民が主張するように、ここで問題なのは、嫌悪をテロリストでなくイスラム教徒に向けることである。それは「ユダヤ人（または日本人）はみな守銭奴で、眞面目に働いている市民を出し抜く邪惡な人間だ」と言うのと、構図としては同じである。

これに加え「今日の少数民族嫌悪には、グローバル化時代に特有の状況もある」と人類学者アパドゥライは言う。グローバルな経済競争に自国が負けた時、「うまくいかないのは、純粋な民族国家がまだ実現していないからだ」と多数派の民族が感じ、少数派への暴力に奔るというのだ。「顔のないグローバル化という力を、民族殺戮 (ethnocide) することはできない。だが少数派を殺すことはできる」。また多くの国家政府が、敵を「グローバルなテロリスト集団」と名付けることで、国内の反体制派、暴力的少数派など、実際には多様な人々をその名でひとまとめにすることが可能になったと彼は言う。今日、かつてのホロコーストに似たことが起こるとしたら、國家が経済的な「負け」を否認するために、または国家が「テロリスト」と呼ぶことで、特定の集団が標的にされる場合である。この時、方角的な越境者たちがいかにわかりやすい標的となるかは、先述の合衆国の例に見る通りである。

IV.

「先入観のトポロジー」は、世界中のどの一角にも同じように当てはまるわけではない。それでも日本列島に目を向ける時、このトポロジーに類似するものは、確かにある。

ユーラシア大陸の東の果てにあり、より東には海が広がる日本列島は、「西かつ北」の方角、つまり朝鮮半島と中国から、稻作や金属器などの文明を享受してきた。魏の歴史書に登場する

邪馬台国があったのは北部九州か近畿地方か、という問いは今日も続くが、いずれにせよ日本列島は、「西かつ北」の北部九州から東（や南）に向かって大陸文明に与していったと考えられている。ここでまず「東西」の軸に沿って見てみると、江戸期より前の語りにおける「東」には、明らかにひなびた印象がある。今日では東行きの列車を「上り」と言うが、かつて畿内より東は「東国」として異化され、そこに行くことは「東下り」だった。スカイツリーで賑わう隅田川近辺も、能『隅田川』では、京でさらわれた我が子を探し、東国へ下ってきた狂乱の母が、息子の亡靈と再会する場所である。ラストシーンでは、母の目から子供の亡靈の姿が見えなくなり、「東雲のそらもほのぼのと、明け行けば跡消えて、わが子と見えしは塚の上の、草茫茫としてただ、しるしばかりの浅茅が原と、なるこそあはれなりけれ」との地謡の言葉が悲しみを誘う。

東の方角はまた、古来より、中央政権から「征服すべき野蛮人の住むところ」とみなされてきた。それは日本の神話や歴史における「征」や「夷（異民族）」の字の使い方に見てとれる。『古事記』では神武天皇も倭^{ヤマトタケルノミコト}建^{タケル}命も、現在の宮崎県や奈良県から東征し、荒ぶる神たちや「蝦夷等」を服従させたとされるし、奈良から平安時代にかけては「征夷大將軍」坂上田村麻呂が、東北地方の族長・阿^ア曽^{テル}流為^イと対峙し、この地を制圧した。

東北が出てきたところで注目したいのは、「南北」の軸である。一般的な日本論は、「東西」は論じても「南北」への視点を持たない、と赤坂憲雄は指摘する。これは健忘というよりも、意図的な忘却かもしれない。戦いの歴史をとっても、東西のみに注目すれば、関ヶ原の合戦といった一つの種族=文化内の領土争いに帰着する。が、赤坂によれば「南北の軸に目を転じると、様相はたちまちにして一変する。そこには、定められた土儀は存在しない。…それは、蝦夷・アイヌ・琉球といった、少なからず種族=文明的な断層を孕んで対峙する相手との、いわば植民地主義支配のための戦争である」。この「蝦夷」という言葉は象徴的である。古代には「えみし」と読んで東北地方の人々を指した語が、中世には「えぞ」と読んで主にアイヌの人々を指す。先述の阿曽流為、また15世紀のコシャマインや17世紀のシャクシャインらアイヌは、いずれも日本史では「蝦夷」である。大和民族の圧政に対し、蜂起した彼らの「異質さ」は、京の人々が〔E〕。

元來の東北は、赤坂によれば、和人（大和民族）のみならずアイヌの同族もいて、「多元的な種族=文化の交錯する、カオスの土地である。…北に開かれてゆく東北があり、西や南へとつながってゆく東北がある」。にもかかわらず、「東」の後進性や野蛮さ、「北」の貧しさや原始性というレッテルを貼られてきたのが、「東かつ北」ではないだろうか。

中央政権がこの方角に対して抱いてきた先入観は、今日も折に触れて顕わになる。たとえば「[東日本大震災による社会的資本の毀損が] 25兆円という数字もあります。これは、まだ東北で、あっちの方だったからよかった」との復興大臣の言葉（2017年4月）がそれである。

大臣は辞任したが、発言の3日後、「『あっち』の痛み わかりますか？」と題する70歳の女性の投書が新聞に載った。「私は『あっち』に暮らして8年。『白河以北』という嫌な言葉が今回ほど浮かんだことはありません」。「白河以北一山百文」という言葉は、戊辰戦争の折、新政府軍側が言ったとされるが定かではない。いずれにせよ、もし大震災が首都圏よりも西で起つたら、「あっち」「よかった」という言葉は大臣の口にのぼつただろうか。

「南」への先入観も、北へのそれと酷似している。上に「蝦夷・アイヌ・琉球」と併記されているように、琉球の人々もまた、大和民族から見れば異民族であった。琉球王国はアジア一帯の中継貿易で栄え、近世には清と島津藩に両属して、東西南北へと開けていたが、明治時代、政府による軍隊派遣などを経て日本最南端の県・沖縄となる。この出来事を「琉球処分」と呼ぶ時、「処分」という語に、「征夷」と同じく、遠隔地の反抗勢力を「正しく」制圧するという含みがないだろうか。また第二次大戦中、沖縄は日本で唯一、地上戦が行われた場所であり、現在は国土面積の0.6%に過ぎないこの県に、在日米軍施設の74%が集中している。

これらはすべて琉球／沖縄という場所の「地の利」が招いたことであって、先入観とは関係ない、と言えるだろうか。たとえば2011年、アメリカ国務省の日本部長が「沖縄の人々は怠惰すぎてゴーヤーも作れない」などと述べたとして更迭されたが、もしこの発言が事実ならば、ここに現れているのは世界の「北」から「南」への先入観ではないか。またそれは同時に、「北」のヤマトンチュ（大和民族）から「南」のウチナーンチュ（沖縄の人々）へ向けられた先入観とも似ていなか。というのも、沖縄の基地経済への依存度は、県の発表によれば1947年の15.5%から2014年には5.7%にまで下がっているにも関わらず、本土では依然として「基地をなくしたら沖縄の人々は生活できなくなる」と信じる人が少なくないのである。そこには「南の人は自ら仕事を生み出さない」という先入観が働いていないだろうか。

沖縄の日本復帰から45年、ヤマトンチュがウチナーンチュに対して抱く先入観は、「人が温かい、のんびりしている」など一見肯定的なものになったかもしれない。沖縄はいまや観光リゾートや移住先として、本土の人々に「夢」や「憧れ」を与えるまでに発展している。しかし、沖縄に米軍基地が集中していることを「本土による沖縄への差別だ」とする意見について、54%の沖縄県民が「その通りだ」と答え、「そうは思わない」の38%を上回るという世論調査結果（2017年）を見るなら、この「差別」がどこから来るのかを考えなくてはならない。もし本土の人々が、基地のフェンスから目をそむけ、青い海や白い砂浜、ハイビスカスの花を見るためだけに「南」に行くならば、たとえ何百回訪れたとしても、自らの享楽性と怠惰さを「南」の人に投影し、それを相手の本性だと勘違いして帰つて来ることになるだろう。

V.

これまでの議論からわかるように、方角と先入観の関係性は、基本的に二項対立である。パ

レスチナ出身の文学学者サイードによれば、「東方（Orient）」とは、「西方（Occident）」つまりヨーロッパにおいて、「西」の優越を認識するために人為的に創られた歴史的・地理的・文化的実体であり、二つはペアである。ただし彼の論じる「東」と「西」は、〔F〕人類学者レヴィ＝ストロースが、通文化的な分析に用いた二項対立の概念 — 「男」と「女」、「生」と「死」、「自然」と「文化」など — とは性質的に異なる。というのもレヴィ＝ストロースにとって二項対立は、すべての文化に共通する普遍的な枠組みのはずであって、いつ・なぜ・誰によってそれらの対が作られたかは問わないからである。その点、サイードに影響を与えた〔G〕 哲學者フーコーは、「正気」と「狂気」、「健康」と「病気」、「合法」と「犯罪」などの価値判断的な対に注目し、負の意味を持つほうの概念が、入院や入獄といった経験を通していかに社会的・文化的に作られるかを論じた。フーコーやサイードの〔H〕 手法は、私たちが何気なく使っている二項対立概念 — たとえば「男」「女」 — の不均衡を暴き、さらには、なぜ項が二つでなくてはならないのか、二項の間にあるのは断絶ではなくグラデーションではないのかといった、より根本的な問い合わせと私たちを導く。

〔I〕、生きている限り場所に縛られる人間は、方角の先入観から逃れられるのだろうか。こう問う時、「コスモポリタン」という理想が思い浮かぶ。たとえば、東西の対立を煽っていると誤解されがちなサイードは、キリスト教徒であり、合衆国に暮らし、故郷から距離を置くことに価値を見いだしていた。また彼の友人で音楽家のバレンボイムは、ロシア出身のユダヤ系両親のもと、アルゼンチンで生まれヨーロッパで暮らし、ヒトラーが愛聴したワーグナーの作品をイスラエルで指揮して物議を醸し、さらにサイードと共にパレスチナ・イスラエル合同青年オーケストラを作った。二人とも「世界のどこも故郷であり、また故郷ではない」という旨の発言をしている。

だが、このように東西南北を駆けめぐり、どこからも等距離を置こうとする人のみがコスモポリタンなのだろうか。「私は自分の村から一度も出たことがないし、ここが一番好きだが、外から来たあなたの考えもわかる」と言うことも私たちには可能なことを思えば、コスモポリタニズムはむしろ、ポロックらの言う「無限のあり方（infinite ways of being）」ではないだろうか。ポロックらは主張する。全女性のために闘おうとしたフェミニズムが、ほどなく人種や民族といった女性間の差異と、西欧中心主義への批判をつきつけられ、複数形の *feminisms* へと変化したように、コスモポリタニズムもまた複数形でなければならない、と。

私たちはつねに、今いる場所で、消えることのない先入観を乗り越える自分なりの努力をしなければならないだろう。たとえ多く旅し、いろいろな場所に住もうと心がけても、行く先々で方角に基づく先入観はあるだろう。東西と南北、二つの軸を視野に入れた「先入観のトポロジー」は、自分も他人も、あたかも故郷の磁場からも方角からも解放され、自由でリベラルな主体として世界中を闊歩し、誰とでも平等に邂逅できるかのような錯覚を抱きがちな今日という時代に、自分や他人を、敢えてある方角に結びつける。これは逆説的な知的訓練である。

参考文献

- 赤坂憲雄『東西／南北考：いくつもの日本へ』岩波書店、2000年。
- グゼリミアン、アラ編『バレンボイム／サイド 音楽と社会』宇野真紀子訳、みすず書房、2004年。
- 小島亮『中欧史エッセンツイア』風媒社、2007年。
- 小山弘志、佐藤健一郎校注・訳『謡曲集 2』小学館、1998年。
- 「ギリシャ人『怠け者』じゃない 独大衆紙に『危機の原因』記事や投稿」朝日新聞、2015年7月30日朝刊。
- 鈴木恵子「『あっち』の痛み わかりますか？」オピニオン＆フォーラム 声、朝日新聞、2017年4月28日朝刊。
- 高橋和夫『パレスチナ問題』放送大学教育振興会、2016年。
- 堀武昭『東欧の解体 中欧の再生』新潮社、2000年。
- 武井彩佳『〈和解〉のリアルポリティクス：ドイツ人とユダヤ人』みすず書房、2017年。
- 「沖縄1：温度差」フォーラム、朝日新聞、2017年5月14日朝刊。
- 「米軍基地集中 『差別だ』54% 沖縄県民調査」朝日新聞、2017年5月12日朝刊。
- Appadurai, Arjun. *Fear of Small Numbers: An Essay on the Geography of Anger*. Duke University Press, 2006.
- 藤倉達郎訳『グローバリゼーションと暴力：マイノリティーの恐怖』世界思想社、2010年。
- Clifford, James. "On Orientalism." In *The Predicament of Culture: Twentieth-Century Ethnography, Literature and Art*. Harvard University Press, 1988, pp. 255-276.
- Pollock, Sheldon, Homi K. Bhabha, Carol A. Breckenridge, and Dipesh Chakrabarty. "Cosmopolitanisms." In *Cosmopolitanism*, edited by Carol A. Breckenridge, Homi K. Bhabha, Sheldon Pollock, and Dipesh Chakrabarty. Duke University Press, 2002, pp. 1-14.
- Said, Edward. *Orientalism*. Vintage Books, 1978.

(このページは空白です。)

次の問題（1－42）には、それぞれa, b, c, dの答えが与えてあります。
各問題につき、a, b, c, dのなかから、最も適当と思う答えを1つだけ選び、
解答カードの相当欄をマークして、あなたの答えを示して下さい。

例 (43)

a b c d

-
1. 資料文1頁に始まるセクションIの見出しとして、最も適切なものはどれか。
 - a. 「先入観のトポロジー」：地域が持つ方角以上の意味
 - b. 「先入観のトポロジー」：イメージと実態の乖離
 - c. 「先入観のトポロジー」：方角に結びつけられたイメージ
 - d. 「先入観のトポロジー」：イメージによる差別の創出

 2. 資料文1頁の空欄[A]に入る語として、最も適切なものはどれか。
 - a. 地政学
 - b. 地層学
 - c. 地質学
 - d. 考古学

 3. 「先入観のトポロジー」における格助詞「の」は、次のうち何を表しているか。
 - a. 具体的な内容
 - b. 所有ないし領有
 - c. 性質ないし状態
 - d. 部分に対する全体

 4. 資料文1頁に始まるセクションIIの見出しとして、最も適切なものはどれか。
 - a. 先入観の展開における「中欧」の役割
 - b. ヨーロッパ各地域の特殊性と先入観
 - c. 先入観の誕生の際に宗教が与えた影響
 - d. ヨーロッパでの先入観の発生と定着

5. 資料文2頁の〔B〕に入る国名はどれか。
- a. スペイン
 - b. デンマーク
 - c. オランダ
 - d. オーストリア
6. プロテスタント系キリスト教についての説明として、適切なものはどれか。
- a. 今日のアイルランドでは、イギリスとは異なるプロテスタント系キリスト教徒が多数派を占める。
 - b. ルター、カルヴァンに先立ち、ボヘミアのフスがカトリック教会を批判した。
 - c. 英国国教会は、ヘンリ8世が自分の後継者を認めようとしない教皇と対立し、カトリック教会を離脱したことに端を発する。
 - d. 今日のドイツでは、北部にカトリック系、南部にプロテスタント系キリスト教徒が多い。
7. ギリシャが財政的危機に陥った際のドイツの大衆紙の記事や投稿に、資料文の筆者が言及した目的について、資料文に最も適合するものはどれか。
- a. ギリシャが財政破綻の危機に陥ったことから、ギリシャ人の労働時間をドイツ人の1.5倍とする統計結果には疑問が残ることを示すため。
 - b. 記事や投稿は先入観に基づいてギリシャ人の国民性を誤解しているのであるから、ドイツは財政支援を拒むべきではないことを示すため。
 - c. ギリシャへの支援に反対する記事や投稿が大衆紙に掲載された事実から、上層市民より大衆に先入観が強いことがわかることを示すため。
 - d. 自らを勤勉であると自覚し、ギリシャ人を怠惰であるとみなすことにドイツの人々の先入観が表れていることを示すため。

8. 資料文2頁の空欄〔C〕に入る句として、最も適切なものはどれか。
- a. 宗教的・文化的に相容れないヨーロッパであり、いわば「むりやり同じクラスにさせられた同級生」
 - b. 心情的には同じヨーロッパだが、アメリカ合衆国と肩を並べるために、いわば「敢えて距離を置かねばならない同級生」
 - c. 遅れてついて来た近代ヨーロッパであり、いわば「手本を見せてやるのは良いが、トラブルにまでつき合いたくない同級生」
 - d. 自分たちと関わることなく独自の歴史を作ってきたヨーロッパであり、いわば「遠くから眺めていたい、エキゾチックな同級生」
9. 「東西冷戦」の事例として最もふさわしいものはどれか。
- a. フォークランド紛争
 - b. 中華民国と中華人民共和国の対立
 - c. 第1次～第3次印巴戦争
 - d. ローデシア紛争
10. 政治や経済のシステムの違いを、その中にいる人間の本性の違いと誤認している例として、最も適切なのは次のうちどれか。
- a. 同じモンゴロイドでありながら、イヌイットを狩猟採集民、日本人を農耕民と呼ぶこと。
 - b. パレスチナやイスラエルに移住したユダヤ人をシオニストと呼び、移住しないユダヤ人と区別すること。
 - c. 共産主義政権が宗教をアヘンと呼び、宗教家や信徒たちを弾圧すること。
 - d. 東西ドイツの分立後、西ドイツ人に比べて東ドイツ人を勤勉でないと見なすこと。

11. 「中欧」の人々が「『自分たちよりも東の人々』の異質性を強調するなら、『先入観のトポロジー』はさして変化を被らないだろう」とあるが、ここでの「変化」の説明として最も適切なものはどれか。
- a. 方角と結びつけられた先入観から解放され、根拠のないあらゆる差別から自由な認識にいたるという変化
 - b. 方角に結びつけられたレッテルを貼って自分たち以外の集団を差異化することがなくなるという変化
 - c. 「呪われた、悪しき非人間的社會」というレッテルが「東欧」に住む人々に貼られることがなくなるという変化
 - d. 冷戦時のような政治経済的対立に基づく偏見により人々が差別やからかいを経験することがなくなるという変化
12. ヨーロッパにおける「先入観のトポロジー」の成立に関して、資料文に最も適合するものはどれか。
- a. 資本主義が発達・拡大すると、スロヴァキアの西部は資本主義的労働倫理の影響を受けたため、この地方は「西」に属するとみなされた。
 - b. 北西ヨーロッパの人々は、自分たちを勤勉・自制的などとみなし、それに対して南ヨーロッパの人々を享楽的・精神主義的などとみなした。
 - c. カルヴァン派キリスト教徒は、宗教的な動機から富を蓄積することを肯定したが、富には人を堕落させる危険性があることをも自覚していた。
 - d. 資本主義的倫理が広まった地域の人々は自らを知的・科学的などと自覚したが、東ヨーロッパの人々は自らを精神主義的とみなして対抗した。
13. 資料文3頁に始まるセクションⅢの見出しとして、最も適切なものはどれか。
- a. 先入観の「西性」の強調とユダヤ人差別
 - b. 全世界での先入観と再創造される標的
 - c. 様々な宗教に対する先入観の拡大
 - d. グローバリズムの中での先入観の拡大

14. 資料文3頁の空欄[D]に入る語として、最も適切なものはどれか。
- a. 相似
 - b. 鏡像
 - c. 平行
 - d. 対照
15. 「西性」は筆者の造語だが、これに含まれない性質は次のうちどれか。
- a. 権威への畏怖
 - b. 先取の精神
 - c. 民主主義
 - d. 効率的生産の重視
16. 「主要7カ国（G7）会議の参加国の顔ぶれ」として正しいのは、次のうちどれか。
- a. ベルギー、フランス、ドイツ、イタリア、日本、英国、アメリカ合衆国
 - b. ロシア、フランス、ドイツ、イタリア、日本、英国、アメリカ合衆国
 - c. 中国、フランス、ドイツ、イタリア、日本、英国、アメリカ合衆国
 - d. カナダ、フランス、ドイツ、イタリア、日本、英国、アメリカ合衆国
17. 「経済力の格差は、それぞれの方角に住む人間の本性の違いから来るわけではない」と主張するための議論として、最も適切なのは次のうちどれか。
- a. ヨーロッパ以外の多くの地域は、ヨーロッパからの植民支配によって独自の発展を阻まれてきた。
 - b. ヨーロッパ以外の地域が、キリスト教より精神主義的な宗教を発祥させたのは偶然にすぎない。
 - c. 国民総幸福量（GNH）を追求するブータンも、最終的にはそうすることで国内総生産（GDP）の上昇を目指している。
 - d. ヨーロッパよりも日照時間の長い地域で、人々がヨーロッパ人よりも長い余暇を求めるのは健全であり、理解できる。

18. J教授が子供の頃、級友たちが「意味ありげに彼にニヤリと笑いかけたりした」とあるが、この「笑いかけ」のニュアンスについて、最も適切なものはどれか。
- 教会へ通うというキリスト教的な倫理的義務を怠っている者に対する非難
 - 教会から排除された者に対する、教会に受け入れられている者たちの優越感
 - 教会へ行く多数派に属する者たちの、そうしない少数派に属する者への差別
 - 教会へ行かない者との対比による、教会へ通う自分たちの行為の自己肯定
19. 「犠牲者を二重に葬り去った墓場」と筆者が言う理由として、最も適切なものはどれか。
- 国家が、多くの人が殺害されたことを否定し、現場をキリスト教と共産党パルチザンの聖地にしようとしているから。
 - 国家が、多くの人が殺害されたことを否定し、現場をスロヴァキアの愛国心醸成の場にしようとしているから。
 - 多くの人が殺害されただけでなく、殺害されたという事実がわかるものが現場に何も残されていないから。
 - 多くの人が殺害されただけでなく、モニュメントのシンボルが犠牲者の民族性と殺害された理由を隠蔽しているから。
20. ユダヤ人の登場人物が守銭奴として描かれている作品は、次のうちどれか。
- ワーグナーの歌劇『さまよえるオランダ人』
 - ミュシャの連作絵画『スラヴ叙事詩』
 - シェイクスピアの戯曲『ヴェニスの商人』
 - ドストエフスキイの小説『罪と罰』
21. 「もしこの世にユダヤ人がいなければ、ユダヤ人は創造されねばならない」の意味として、最も適切なものはどれか。
- 旧約聖書に記されている民族として、誰かがユダヤ人と呼ばれねばならない。
 - 人間は常にスケープゴートを求めるものである。
 - 部分的にユダヤ的な性質を持つ者は、誰でもユダヤ人と呼ばれうる。
 - 民族というカテゴリーは、人間が恣意的に創るものである。

22. 「自分と同じ方角から来たとされる他集団を非難する構図」に最も近いものはどれか。
- 女性が「これだから女は嫌だ」と他の女性を批判する。
 - 同僚が酔って騒ぐので、「〇〇社の社員として恥ずかしくないのか」と叱責する。
 - 同じ駅で終電を降りた多くの人に先を越されないよう、急いでタクシー乗り場に行く。
 - 同郷の親友が、自分以外の人と親しくしているのを見て、憤りを覚える。
23. イスラム教における、ユダヤ教・キリスト教との連続性の説明として、適切でないものはどれか。
- ユダヤ教・キリスト教と同じ神を信仰している。
 - コーランは、旧約聖書をアラビア語に逐語訳したものである。
 - 人類はアダムとイブから始まったとされている。
 - モーセもキリストもムハンマドも、みな預言者であるとされている。
24. 「顔のないグローバル化という力を、民族殺戮（ethnocide）することはできない。だが少数派を殺すことはできる」の意味として、最も適切なものはどれか。
- グローバル化を牽引する一握りの人間は、常に陰にいて民族性を明かさないが、国内の少数派なら民族性が目立つため、攻撃しやすい。
 - グローバル化にはあまりに多くの異民族が関わっているため、すべてを殺すことは不可能だが、国内の少数派ならば人数的に殺戮可能である。
 - グローバル化と闘おうとすれば経済大国との戦争になり、こちらが甚大な被害を被るが、国内の少数派ならば確実に相手を抹殺することができる。
 - グローバル化は巨大な非人格的勢力であり、不満のぶつけようもないが、国内の少数派ならば具体的な人間なので攻撃できる。

25. 「北」「西」の人々によるイスラム教徒への先入観と、ユダヤ人（または日本人）への先入観が「構図としては同じである」と述べられている。これについて資料文に最も適合するものはどれか。
- a. 実質的な脅威の程度は異なるとしても、イスラム教国の人々を「招かれざる客」、ユダヤ人や日本人を「守銭奴」「邪悪な人間」などとみなす先入観を、それらの人々全般に押しつけることが共通する。
 - b. 「西」や「北」の人々が、イスラム教国からのテロリストや大量の難民に対して恐怖をいだいたことと、ユダヤ人（または日本人）に対して経済面ではあるが恐怖を抱いたことが共通する。
 - c. イスラム教国の人々が「北」や「西」の人々から「招かれざる客」とみなされいると自覚していることと、ユダヤ人（または日本人）が「守銭奴」「邪悪な人間」とみなされていると自覚したことが共通する。
 - d. イスラム教国に対する「北」や「西」の人々の恐怖には、実際のテロリズムや大量の難民の流入という実態があることと、程度の差はあれすべてのユダヤ人（または日本人）からの経済的な脅威があったことが共通する。
26. 資料文5頁に始まるセクションIVの見出しとして、最も適切なものはどれか。
- a. 日本における少数民族が被った苦難
 - b. 日本における「先入観のトポロジー」の特色
 - c. 日本における和人による侵略の事実の隠蔽
 - d. 「先入観のトポロジー」の日本への応用の限界
27. 能『隅田川』の地謡の言葉において、「茫々」は多義的に用いられているが、資料文の文脈において強調されるニュアンスとして、最も適切なものはどれか。
- a. かすんで見える。
 - b. 伸び乱れている。
 - c. 風で揺れている。
 - d. 生気に溢れている。

28. 日本論に「南北」への視点がないことについて、筆者の考えに最も近いものはどれか。
- a. 近現代の日本史は東京で編まれているため、京都との対比で「東西」の軸を強調する意義の方が意識されやすいのではないか。
 - b. 異民族征服の歴史は事実だが、戦後の平和主義に鑑みて、敢えて国内植民の歴史に言及しないようにしているのではないか。
 - c. 「南北」を網羅しようとすると議論百出となり、歴史家の間で総意が取れないので、敢えて「東西」に特化しているのではないか。
 - d. 異民族征服の歴史を隠し、均質な日本人のイメージを作るため、敢えて「南北」の視点を避けているのではないか。
29. 「蝦夷」が、古代には東北地方の人々を指し、中世には主にアイヌの人々を指したことについて「象徴的」と筆者が述べる理由として、最も適切なものはどれか。
- a. 和人が、異なる二つの民族集団に対して同じ「蝦夷」という漢字を用いたことには、彼らのアイデンティティへの無関心があらわれている。
 - b. 「征夷大將軍」の「夷」の文字は異民族を指すことから、古代の東北地方の人々とアイヌの人々が、和人から見て異民族であったことをあらわしている。
 - c. 同じ「蝦夷」という語が当てられたことと、これら二つの集団がともに和人にとつての侵略的戦争の対象であったことが符合する。
 - d. 古代の東北に住んだ人々と、中世のアイヌの人々が基本的に同じ民族であったことが、両者に同じ漢字の組み合わせが用いられたことにあらわされている。
30. 資料文6頁の空欄〔E〕に入れる句として、最も適切なものはどれか。
- a. 「東男に京女」との称賛を耳にして、ある種の嫉妬を覚えた「東」の男性の荒々しさと、部分的に通じるものがあったに違いない。
 - b. 古今和歌集の「たおやめぶり」に対して万葉集の「ますらおぶり」に見た、原始的な男性性を想起させたに違いない。
 - c. 関東武士の無骨さを「東蝦夷（あずまえびす）」と呼んで嘲ったのとは、また別次元のものであったに違いない。
 - d. 万葉集において見出した、東国の農民による「東歌」の素朴な力強さとは、なんらかの点で異なっていたに違いない。

31. 元来の東北について、「多元的な種族=文化の交錯する、カオスの土地である」という引用における「カオス」のニュアンスとして、最も適切なものはどれか。
- a. 秩序がなく争いが続く混乱
 - b. 絶え間なく変化する流動性
 - c. 奥深く正体をはかり難い謎
 - d. 一元化されていない多様性
32. 「白河以北一山百文」と同じ意味で「文」が使われているのは次のどれか。
- a. 不立文字
 - b. 文雅の士
 - c. 三文小説
 - d. 文民統治
33. 「琉球処分」の「処分」という語に関して、「遠隔地の反抗勢力を『正しく』制圧する」という含みがないだろうか」とあるが、ここでの「正しく」のニュアンスとして最も適切なものはどれか。
- a. 琉球の人々は和人（大和民族）が征服すべき劣った異民族とみなされ、その観念にしたがって
 - b. 琉球の人々は服属を願っていなかったが、彼らのためになると日本政府が独善的に正当化して
 - c. 琉球を日本に服属させることにより、清からの軍事的脅威を軽減することができると判断して
 - d. 貿易で繁栄していた琉球を領土とすることによって、日本を経済的に発展させようと目論んで

34. 日本列島についての議論で、筆者は「日本人」という語を使っていない。この理由として最も適切なものはどれか。
- 「日本人」は、学術的な正確さを期すれば「和人」または「ヤマトンチュ」と呼ばれるべき民族だから。
 - 「日本人」という語は大和民族と同義で使われることが多いが、その慣習自体を批判したいから。
 - 「日本人」というカテゴリーは、日系移民など国外の人々から見れば曖昧なものであり、その輪郭が定かではないから。
 - 「日本人」というと「日本国籍者」という意味に限定されるが、ここでは法制度ではなく民族性の話をしているから。
35. 沖縄に対する本土の人々の心的態度について、「夢」と「憧れ」という語に括弧がついている理由として、最も適切なものはどれか。
- 地上戦によって一度は荒土と化した沖縄が、本土の人々に「夢」や「憧れ」を抱かせるまでに復興した事実を強調するため。
 - 大和民族から抑圧されてきた沖縄の人々が、大和民族に「夢」や「憧れ」を抱かせることで、平和的に立場を逆転させたことを強調するため。
 - 「夢」や「憧れ」は、本質的に仮構のものであり、実際に現地を訪れれば崩れ去るであろうことを示唆するため。
 - 「夢」や「憧れ」は、結局はマスメディアや産業が作り上げたものであり、差別の構造は変わっていないことを示唆するため。

36. J教授によるヨーロッパを中心とする「先入観のトポロジー」と、筆者による日本における「先入観のトポロジー」との比較に関して、資料文の趣旨に最も適合するものはどれか。

- a. 先入観の発生に関して、「西」かつ「北」より発した宗教的影響がある点はヨーロッパと日本に共通であるが、その宗教がヨーロッパではキリスト教、日本では仏教とされる点が異なる。
- b. 「南」に対する「享楽的」「怠惰」という評価はヨーロッパと日本において共通であるが、「東」に対してヨーロッパでは低く、日本では東京方面の列車が「上り」とされるなど高く評価された点が異なる。
- c. 「西」が「文明的」と、「東」が「未熟」と、「南」が「享楽的」とみなされる点はヨーロッパと日本に共通であるが、「北」が日本においては常に「未開」、ヨーロッパでは「文明的」とみなされた点は異なる。
- d. 日本ではかつて文化的に「西」が高く「東」が低くみなされた点は、ヨーロッパとある程度類似しているが、日本において「北かつ東」と「南」が制圧されるべき辺境とみなされた点は、ヨーロッパと異なる。

37. 資料文7頁に始まるセクションVの見出しとして、最も適切なものはどれか。

- a. コスモポリタンとして先入観を克服する努力
- b. 二項対立的把握を克服したコスモポリタニズムの理想
- c. 特定の地域性から距離をとるコスモポリタンのあり方
- d. 先入観を克服したコスモポリタニズムの困難さ

38. 資料文8頁の空欄 [F] [G] [H] に入る語として、最も適切なものの組み合わせは次のうちどれか。

- | | | |
|-------------|-------------|----------|
| a. F : 実証主義 | G : 解釈主義 | H : 一元論的 |
| b. F : 自然主義 | G : 人間中心主義 | H : 間主觀的 |
| c. F : 近代主義 | G : 後期近代主義 | H : 非歴史的 |
| d. F : 構造主義 | G : ポスト構造主義 | H : 脱構築的 |

39. 二項対立についてのジェンダー・セクシュアリティ研究の基本的な考え方として、適切でない記述はどれか。

- a. 人間のジェンダー・アイデンティティには「男」「女」以外もある。
- b. 完全に女らしい人・男らしい人もいるが、大多数はその中間にどこかに位置する。
- c. 人間のセクシュアリティには「男から女への性愛」「女から男への性愛」以外もある。
- d. 「男」「女」は多くの社会の現実において、等価な二項とは言えない。

40. 資料文8頁の空欄〔I〕に入る語として、最も適切なものはどれか。

- a. とはいえ
- b. したがって
- c. さらに
- d. そうであれば

41. 「コスモポリタニズムもまた複数形でなければならない」というポロックらの主張が引用されているが、これに関する説明として、資料文に最も適合するものはどれか。

- a. どこからも等距離を置くという一つの理想はあくまでも変わらないが、各自が独立した判断主体として、それぞれに責任をもって行動すべきである。
- b. 先入観をなくすという目的は共通であるが、サイードやバレンボイムやポロックらなど、コスモポリタニズムの捉え方や実践方法は様々である。
- c. すべての人が自らの民族や地域から距離を取ることは困難であるから、それぞれの境遇に留まりつつ、先入観を乗り越える努力をすべきである。
- d. どこからも等距離を置くという理想にすべての人が達することは不可能であり、実際、コスモポリタンなあり方とは、各自が今いる地点である。

42. 「逆説的な知的訓練」とあるが、ここでいう「逆説」の説明として、最も適切なものはどれか。
- a. どこからも等距離を置くコスモポリタンとしての実践が可能であることと、「先入観のトポロジー」により各自に先入観が根強く残るという事実の両面を把握することで、バランスのとれた世界観を持つよう努力すること。
 - b. どこからも等距離を置くことができるという幻想を持ちがちな時代に、「先入観のトポロジー」により先入観が各自に根強く残っている事実を自覚することで、そこから先入観を乗り越えるための努力の方向の示唆を受けること。
 - c. サイードやバレンボイムのように、どこからも等距離をとるコスモポリタンとなることができるという希望を持つつ、「先入観のトポロジー」により結局は先入観を払拭することは不可能であると自覚して、思索すること。
 - d. 「先入観のトポロジー」から示唆を受けつつ、どこからも等距離を置くサイードやバレンボイムによるコスモポリタンとしての実践と、ポロックらの主張する複数のコスモポリタニズムの主張の両方を勘案し、行動すること。

(このページは空白です。)

